泰と連携しつつ活動し始めるが，大槻が治療者として登場するのは戦後に成ってからである．厚木生まれで，丸井の教え子である古沢平作は，後に丸井から離れるが，戦後の精神分析学の発展に大きく貢献した．上記の人々との関連で，神奈川県内で地域精神医療に大きく貢献した古閑義之，岩井寛，藍沢鎮夫，竹山恒寿，武田専，小此木啓吾，山口哲衛，熊田正春などの医師についても触れる．

（令和3年9月例会）

本居宣長の医学文書と一字薬名

吉川　澄美

はじめに

本居宣長（1730～1801）の医学文書のうち，『折肱録』『方彙簡巻』『方剤歌』『済世録』（『本居宣長全集 十九巻』筑摩書房 1974年）は，薬名を一字で表記するいわゆる一字薬名（一字銘）が多用されている．一字薬名を適切に判読しなければ，その全容の理解は不十分だと言える．これらの一字薬名は，曲直瀬流の『能毒』や『衆方規矩』掲載の字と一致するものが認められる一方で，それらには見いだせないものも少なくなかった．

ところで，一字薬名については国語学の視点から島田勇雄氏が1973年に発表しているが，その対象は中世末から江戸時代前期に絞られている．また，遠藤次郎氏らによる薬箱の調査などで個別に扱われたり，『能毒』の研究で言及されたりしたことはある．しかしながら，医書や薬物書を対象に包括的に調べられたことは今まで無く，その使用実態については未知な部分が多い．

富士川游（1865～1940）の富士川文庫はデジタル化事業が行われ，2018年9月より京都大学と慶応大学の各所蔵本を統合したサイトの試行運用が始まっている（https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital_fujikawa/index.html）．これら一堂に会した本の一字薬名の使用状況を網羅的に調べることにより，富士川文庫という範囲内ではあるが，一字薬名の理解が広げられるのではないかと目論んだ．

1. 富士川文庫における一字薬名を使用する本

富士川文庫の京都大学と慶応大学が所蔵する5622件のうち311件に一字薬名が使われているとわかった．同一刊本や同一タイトルなどを除くと253書目である．全体の傾向としては，薬方書・治法書・配剤記録の中で処方（方剤）の構成薬・加減薬に使われるケースが多い．他にも，曲直瀬道三の『能毒』の類本を典型とする薬物書や薬名辞書の見出しや，『切紙』などの要訣集で用いられている．

専門科別では，小児科，産・婦人科，外科・痘科，眼科など広範にわたっている．また，一字薬名を使用する医家・流派は，曲直瀬流とその弟子系統はもとより，永田徳本の伝本，板坂流・馬島流・北尾春圃など後世方派に広く見られる．しかも，後世方派に限られるわけではなく，仲景方を集めた古方派系の本にも見られる．例えば，後藤椿庵の『治法漫録』や岡宗益（定理齋）の『長沙方原』，著者不詳の『古方区別』などである．また，折衷派では和田東郭の『養嬰瑣言』，漢蘭医では吉雄耕牛の『阿蘭陀瘍科之書』や『蘭方吉雄家方紀聞』などに見られる．その他，流派や著者不明の諸家伝薬集などにも一字薬名が使われている．

2. 一字薬名専書・集録本

上記のように薬名の代替として使用する他に，一字薬名そのものに関心を寄せて字の由来となる異名などを調べた専書がある．渋江抽斎の『一字薬名攷』（380余字）や著者未詳の『薬品異名』（230余字）が例として挙げられる．両者とも『輟耕録』由来の一字薬名を集録するなど，曲直瀬流以外のものも多く見られる．その他，『玉朋集』や『三省

堂薬室日用方鑑』は一字薬名の専書ではないが，本文で使われる一字薬名をまとめて掲示し，その数は各々190字を超える．

以上を含めて，富士川文庫全体としては一字薬名をまとめて掲載する本は，15本見つかった．そのほとんどは筆写本であるが，『済民日用大全』（刊）（130字程度），蘭薬を多く集めた『薬能識』（刊）（70余字）のような刊本もある．尚，富士川文庫以外では，『衆方規矩刪補』（元文2・1737年刊北山寿庵）に付される「薬名註解」や，山崎美成の『薬銘考証』（写本・国会白井）などがある．

3. 道三の『能毒』に類する薬物書と一字薬名集録本のクラスター分析

富士川文庫には能毒書の初期の形を反映しているとされる『能毒全并追加』の他に，『金沢氏横藍表紙折紙本』に含まれる『能毒集』，『板坂小児方』に合綴される『能毒書』などの能毒書の類がある．これらを含めた6種の能毒書類（『注能毒』と『能毒図鈔』はほぼ同じなので1種とした）に対して，一字薬名の使用パターンを比較した．尚，富士川文庫以外では『薬性能毒』（寛永6・1629年，曲直瀬玄朔編）も比較対象に含めた．方法はBlondelらのアルゴリズムによる統計解析（Vincent D Blondel, et al. Journal of Statistical Mechanics: Theory and Experiment 2008（10）, P1000）を採用し，近縁性を可視化するツールGephi（https://gephi.org/）を使用した．

その結果，『金沢氏横藍表紙折紙本』に含まれる『能毒集』は『能毒全并追加』との近縁性が高く，『板坂小児方』に合綴される『能毒書』は『注能毒』あるいは『能毒図鈔』との近縁性が高いと確認できた．

さらに，『一字薬名攷』『薬品異名』『玉朋集』『三省堂薬室日用方鑑』『済民日用大全』『衆方規矩刪補』を加えて同様に解析した．その結果，『三省堂薬室日用方鑑』と『薬品異名』とは近縁性があること，『済民日用大全』は独立したクラスターであることが確認できた．

4. 一字の選ばれ方，作られ方

薬名の代わりとして使われる一字の由来には，以下のタイプがある．

1）薬味や起源植物の漢名・異名のうちの一字
　例：蘇（紫蘇）
2）漢字の旁などの構成部品　例：穌（紫蘇）
3）同音の別字　例：ソ（紫蘇）
4）同義字（または同訓字）　例：甦（紫蘇：蘇と甦はいずれも“よみがえる”の意味）
5）一字から連想される別の一字
　例：軾（紫蘇：蘇軾から）
6）基源植物や薬品の特徴を象徴する字
　例：収（五味子：“酸以収”）

さらに，合字や作字にはある程度の規則性が認められるものがあり，ア）炮製・加工法によるもの，イ）植物の使用部分や色などの特徴を限定するものが典型である．ア）の例としては，氵を付けて酒製を表すもの（洒：酒製黄柏），姜を偏にして姜製を表すもの（[姜芊]：姜製地黄）が挙げられる．イ）の例としては，当帰尾を［尾斤］，当帰首を［首斤］，白芍を的，赤芍を［赤勺］などである．これらはいずれも意味を付与するために作られた字である．

一方，［玄彡］（玄参）のように，漢名の二字に各々対応する字または漢字部品を合わせたものもある．この例では，すでに玄は五味子に，彡は人参にそれぞれ割り当てられていたことが配慮されて，曖昧さを回避するために［玄彡］という合字が作られたと考えられる．

5. 一字薬名から垣間見えること

① 一字薬名の増加と多様化の背景

富士川文庫における一字薬名使用本の時代変遷を俯瞰すると，中世末期から江戸時代初期・前期は曲直瀬流の一字薬名が主流だったが，江戸時代中期以降はそれら以外の字が増えてきたことが窺える．その背景には，炮製・加工品，産地の区別など薬店で扱う種類が増えたこと，流派や医者毎の薬品に対するこだわり，さらに蘭薬など新しい薬品の登場があると考えられる．

道三の時代以来，一字薬名は方薬の組立方法を伝授し，学習する際に活用されてきており，それは江戸時代後期においても例は見られる．そして何より，医者の日常の診療記録のメモなど，実用に便利なものであった．このようにして，一字薬名はその使用場面を増やしながら多様化し，息長く使われた．

② 臨床医の変化と出版物への使用縮小化

もともと一字薬名を多く使っていたのは臨床医であり，現在我々が目にすることができるような書物よりも，むしろ個人的に使用されてきたと想像できる．そして，使用者や使用範囲が広がることは同時に複雑化したことを意味する．たとえ個々の医者の使用パターンには一貫性があったとしても，流派などを跨いだ全体としては，同じ字が複数の薬品に使われ得るような紛らわしい状況も増えてきたであろう．

時代が下ると，医者の数も増えて医学は細分化し，多様な読者を想定した出版物に使われる比率は少なくなってきた．これは江戸時代前期までの曲直瀬流やその弟子の系統が多く，その影響が出版物にも色濃かった頃とは大きく異なる．さらに，薬味の加減運用にそれほどこだわらずに，既成処方をそのまま使う医者が，江戸後期以降は相対的に増えたことも，出版物に一字薬名の使用頻度が減ったことに関係しているかもしれない．

（令和3年10月例会）

朝鮮の医書『東医宝鑑』について

吉村　美香

はじめに

朝鮮の医書『東醫宝鑑』は1613年に編集され23編25巻で構成されている．許俊（ホ・ジュン）という漢方医が編集．2009年にユネスコ「世界の記憶」に選定された．2019年からユネスコ登録に尽力した（韓国）国立韓医学研究院が主導となり，巡回展示会，各所の博物館での特別展，シンポジウム，叢書の刊行，ハンドブックの刊行といった『東醫宝鑑』ユネスコ記憶遺産登録10周年イベントが行われた．筆者も『東医宝鑑叢書』『韓医学ハンドブック東医宝鑑』の刊行に携わった．

今回はその刊行物から，主にユネスコ登録までの流れ，『東医宝鑑』の刊行の背景を見ていく．

『東医宝鑑』と韓国の医学文化

『東医宝鑑』や，作者の許俊（ホ・ジュン）は，韓国では，たびたび，ドラマ，映画，小説のテーマになってきた．ドラマは1970年代から2010年代まで4回，映画は1回，小説はシリーズで1回，テーマにしたものが制作された．その全ての大衆メディアコンテンツは大ヒットとなった．

『東醫宝鑑』を扱っておけば，必ず大ヒットするし，主演した俳優の人気も上がるという「不敗神話」も出来たそうだ．その影響で，漢方医院や漢方医学の需要が増し，漢方医学科の入試難易度もあがるなど，ドラマが社会的にも影響を及ぼした．

様々なエンターテイメントとして，韓国では人気のあった，朝鮮の医書『東医宝鑑』であるが，2009年，その独創性，記録情報の貴重さや重要性，関連人物の業績および文化的影響力など認められ，また日本・中国にも伝播し東アジアの医学の発展に大きく寄与していることが評価され，ユネスコ世界記録遺産（Memory of the World）に選定された．

「大衆メディアが繰り返しヒットしたことで，東醫宝鑑はユネスコ登録されたという可能性はあるのか？」ユネスコ登録に尽力された，韓医学研究院の安相佑（アン・サンウ）博士に伺ってみた．

「小説やドラマといった大衆メディアを通じて，一般の人たちに親しみや認知度が上がっただけ